

東北関東大震災チャリティ・コンテンツ

プーラが戻る

古川日出男

早稲田文学2011

こんな時に思い出すのはプーラのことだ。

言葉づかいは少し間違っているかもしれない。こんな時に思い出せるのは、と訂正したほうが真つ当なのかもしれない。しかし、真つ当とは何だろうか？ あらゆるイメージがあらゆる人たちに「その日」の以前と以後とで異なる感情を与えている。だとしたら、この瞬間、この今に忠実に回顧するしかない。ふり返るしかないのだ。

躊躇をしている余裕はないし、個人的には善いことだとも思えない。そして善悪というラインすら消えた。

だとしたら素直に思い出そう。僕はこんなふうに語られたことがある。その女性から語られた経験があつて、ある側面の感触は、ほとんど告白に似ていた。真摯で、個人的で、その女性のボイスを、僕はずっと忘れていなかった。

忘れていなかったのに、思い出したのは今なのだ。

プーラは彼女が通った中学校に棲む。卒業してから十数年が経っていて、在校していた頃には彼女は全然プーラが存在を知らなかった。「いなかったんだと思う」と彼女は言っていた。僕はこの瞬間、耳で思い出すから、これは彼女のボイスの（やっぱりボイスの）喚起だ。

プーラはその学校のプールに棲む。

プーラは、冬、プールから全部の水が抜かれてしまうまでは、そこに棲む。

プーラは夏には現われていなかった。

プーラは夜行性かもしれない。夜、ばしゃり、と水音を立てて——まず首から——現われる。首だ。頭ではない。長い長い、長い首の先端にたぶん頭がある。「首長竜だと思う」と彼女は言っていた。僕はもち

ろん、彼女は寓話を語っているんだなと思った。ちょっとしたファンタジーを創りあげて、何かを作家の僕に（とても真摯に、個人的に）伝えようとしているんだと直感した。虚構だ。

虚構の作り手の僕には、虚構に仕立て上げるしかない。それが伝わるのだ、と信じて。しかし、この理解で正しかったのか。今の僕は疑う。これは実在するプーラの物語ではなかったのか。

プールサイドの監視台の影に隠れて、彼女はプーラを待った。最初、そうだった。それからプーラは現われて、その首の長さからだいたい全容を窺わせた。その中学校のプールは平均的な二十五メートル・サイズ、そこに収まるのだから体長は十メートル以内だろうと彼女は判断した。僕がそのボイスに耳を傾けながらいちばん感心したのは、彼女がつぎつぎと判断していった、ということだ。そうだ、彼女は自分で判断し

た。体長は十メートル以内で、たぶん八メートルはない。七メートルはある。雰囲気は恐竜、プレシオサウルスとかのようで、だから“未確認の動物”というのが最適の形容かもしれない。あのネス湖のネッシーや、そうした類い。そこから彼女は判断した、名前を授けるのならば、だったらプールの怪獣なのだから、プーラ。

彼女は、水飛沫には消毒薬の匂いがした、と言った。

彼女は、静かにプーラと交流をはじめた。

プーラは、七度めの夜にやっと彼女を認めた。

認めるというのはどういうことなんだろう？ 七度めの夜であることにはどんな意味が孕まれているんだろう？ 彼女は餌付けをしたと言った。それから「あたしはプーラに『プーラ』って呼びかけて、それがプーラ自身の名前なんだって、何日かは掛かったけれどもわかってもらっ

た。あたしはプーラがそんなふうに関口なことに、なんだろう……何て言ったらいいのかな、誇り？ たぶん誇りを覚えたの。だって、ちゃんとした知性がなかったら、二十五メートル・プールでなんて棲息できない。それにあたしは、プーラと目を合わせたし。そうやって覗いていると、うん、プーラは考えているのがわかった。プーラはちゃんと思考して、あらゆることを思っていて、感情だってあるの。いっぱい、ある」と続けた。

彼女とプーラは、もちろん会話は交わさなかった。

彼女は、だから、プーラがそこに棲息しはじめた契機を知ることにはなかった。

（契機？ 奇妙な言葉だ。けれどもこんな言葉しか僕には使えない。たぶん、彼女のボイスには「契機」なんてフレーズは孕まれていない。し

かし、僕の脳裡ではそんなフレーズに変換された。もともとの言葉が、発展して……。それは僕の内部に播種されて、芽生え、育ったのだ。そんな言葉なのだから、このまま使おう。契機、あるいは発端。プーラは「どうしてか」その学校のプールに棲むきっかけを得て、実際に棲み、たぶん成育した。プーラは卵生だろうか。あるいは卵胎生の動物だろうか。卵胎生というのは、たとえば鮫やエイがそうだ。母親の胎内で孵化し、「幼生」という形態で生み出される。そうなのか、プーラ？ 僕は真摯にプーラのことを、お前のことを考えている。真摯に、……。もしかしたら個人的に)

彼女とプーラは、しかし互いに認め合って、ついには泳ぎ合った。

その女性のボイスで紡がれた物語の、いちばんの核心——というか、大切な——部分は、そこだったと思う。彼女もまたプールに入った。も

ちろん脱衣した。彼女は全裸で泳いだと言ったし、その発言にも、そこから起ちあがる情景にも、多少の官能性はあつた。だが、感触はただちにフェイズを変えた。プーラもまた裸だ、と僕は気づいた。そうだ、プーラは最初から全裸なのだ。その「首長竜だと思う」と彼女にさらつと断じられた怪獣は。プーラは雄だろうか、雌だろうか。そのプーラと、彼女は、手や鰭やそうした類いはつながなかつたけれども、泳いだ。彼女はプーラの首や尾やそうした類いには触れなかつたけれども、ともに泳いだ。水中でターンもした、と言った。「そうなの、身を躍らせたのよ」と言ったのだ。

「水底まで泳いだのよ」と。

秋の話だ。

この物語の背景は秋だった。初秋からはじまって、それから晩秋に

なって、それでも彼女は泳いでいる。彼女のボイスの温かさが、濡れた、鳥肌を立てる皮膚に暖をとらせている。だが、物語は冬になる。このファンタジーは冬になってしまうのだ。

プールからは水が抜かれる。排水はほんの数時間で完遂される。彼女はそれを見た。確認した、空っぽのプールを。棲息する動物など、どこにもいなかった。彼女は「もぬけの殻って言葉を、うん、人生で初めて、頭に思い浮かべた」と言った。

プーラ、と彼女は呼びかけた。

プーラ、プーラ、と彼女は言った。

空のプールにはその呼び声がちゃんと反響した。プールに、プーラ、ラ、ラ、ラ……と。その時、彼女はふいに悟った。彼女は了察したのだ、プールには排水口があって、その通路の奥にまで呼びかけは響いて

いる。ラ、ラ、ラ……と響いていて、だから。「届いているのがわかったの」と彼女は言った。

「うん、どこかに、脱けちゃった、プーラに」

ここまでが彼女のファンタジーだ。僕はある意味でただのファンタジーだと直感した、これを実話として語るならば彼女の精神には正常と異常のラインの「どちら側か」との問題が生じるから。しかし、そんな問題は、あるのか？ そんなラインは果たして実際引かれていたのか？
虚構？

何かを虚構だと断じられるほど、僕たちは現実を見届けたことがあるのか？

それに、と僕は思った、彼女は判断しつづけたのだ。彼女は自分で、それをした。彼女には断じられるだけの力があつた、ということだ。そ

のことを僕は思い出す。僕はこの今、その女性のあのボイスとともに（断片の響きすら失われないボイスの、ほとんど総体とともに）思い出して、すると、ああプーラはいるのだとわかる。いや、プーラはいたのだとわかる。

*

それからだ。

僕はこれからプーラを見る。あらゆる場所にプーラを捜す。それは、近所の小学校のプールかもしれない。区民プールかもしれない、何ブロックか離れた場所の。いや、あちこちのスポーツ・ジム内のプールかもしれない。その可能性を誰が否定できる？ あらゆるプールには排

プーラが戻る

水口があつて、排水用の「見えない」通路があつて、そして、それらの通路と通路はどこかでつながっている。たとえば地中の網となつて。網と接続する地中の川となつて。そこからプーラが戻らないと、誰が言える？　ここから、僕は捜す。この今から、＂その日＂の以後でもあるこれから、ちゃんと捜し出す。

絶対にプーラは戻る。

〈了〉

この作品は、二〇一一年三月一日に起きた東北関東大震災のチャリティのために書き下ろされ、早稲田文学サイトにおいてPDFファイルとして販売されました。販売金額は全額、日本赤十字社に義援金として送付されます。

PDFファイルは二〇一二年三月までの期間、コピーフリーとして、二次配布を可とします（発行元と著者および著者の許諾を得た方以外の第三者による販売はできません）。どなたかからの転送でこのファイルをお読みになった方は、どうか、任意の金額を下記義援金窓口にご自身でお送りくださいますよう、お願いいたします（参考までに、早稲田文学サイトでの一次販売の価格は、五〇〇円でした）。

日本赤十字社義援金窓口
郵便振替（郵便局） 00140-8-507

日本赤十字社 東北関東大震災義援金

（取扱期間 二〇一一年九月三〇日まで）

または

銀行振込

三井住友銀行銀座支店（普）8047670

三菱東京UFJ銀行東京公務部（普）0028706

日本赤十字社（ニホンセキジュウジヤ）

（取扱期間 三月二〇日現在未定）

著者 古川日出男

発行所 早稲田文学会

東京都新宿区西早稲田 1-9-12-2F

Tel/Fax 03-3200-7960

copyright by furukawa hideo 2011
published by wasedabungaku 2011